

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381013

研究課題名(和文)現代中等教育における「自由教育」の展開に関する研究

研究課題名(英文)On the development of liberal education in the present secondary education

研究代表者

片岡 洋子 (KATAOKA, Yoko)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：80226018

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：フランスのラ・シオタにあるCollege Lycee Experimental Freinet (CLEF)は、公立のコレージュ(中学)からリセ(高校)へと連続してフレネ教育のクラスを設置した中等教育の実験的プログラムである。また日本の自由の森学園中学・高校は、点数による評価をしない、生徒の自発性に基づいた教育をおこなうことなどにおいて、フレネ教育と理念を共有する学校である。これらの二つの学校で授業観察、教師・生徒・親のインタビューをおこない、現代の中等教育が抱える諸問題と変革の可能性の諸条件を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The CLEF (College Lycee Experimental Freinet) is an experimental program of secondary education based on the Freinet method, which has been carried out continuously from College (junior high school) to Lycee (senior high school) in the city of La Ciotat, France. On the other side, Jiyunomori Gakuen is a Japanese junior and senior high school that has much in common with the Freinet method and its philosophy, in such aspects as trying to implement an education centered on the students' initiatives without relying on a grade-based evaluation. In both schools, we observed classes and conducted interviews with teachers, students, parents and guardians, thus letting us able to define the difficulties and problems at stake in the present secondary education system, and we also tried to bring out the conditions for improving it.

研究分野：教育学

キーワード：フレネ教育 中等教育 自由教育

1. 研究開始当初の背景

1) 本研究グループは、2011-2013年基盤研究(c)「現代の子ども・青年の生きづらさと生活綴り方の現代的意義」において、子どもが家族や友だち関係での葛藤を表現し、それを他者と共有し、ともに考えあう生活綴り教育の実践が困難になった背景と、子ども・青年の生きづらさの現状について研究した。そのなかで浮かび上がったのは、中等教育における学習疎外状況の問題である。生活の事実の表現を学びへとつなげていく生活綴り教育は、小学校教育においては今も数々の実践がおこなわれている。しかし、自己と他者の関係や現代社会の中での自分の生き方を本格的に考えるはずの思春期と重なる中等教育においては、教科学習が受験との関係でしか意味を感じられずその結果、学習と自己省察とが離れてしまう。比較的よい成績を得て大学に進学しても、自分の問題を社会や他者との関係で考える経験を持ってないできた若者たちの生きづらさへの聞き取り調査によって、そうした問題が共通して浮かび上がってきた。

2) 2011年3月11日の未曾有の大震災・大津波・原発事故の直後、報道で被災の事実を受け、多くの子どもたちがこれからの社会のありようと自分の生き方についての問題意識を持った。にもかかわらず、ごく少数の教師たちが自発的にとりくんだ実践を除いては、被災地ですえも「通常」の「授業時数の確保」と「学力向上」を優先課題とする学校教育がすすめられている。このような状況下で中学生や高校生の多くは正規の教育課程において語り合う機会を持っていないが、考えていない訳ではない。福島県立相馬高校の演劇部や放送部の高校生や、岩手県宮古市田老地区の中学生での津波被災体験を語り継いでいる高校生は、県外の高校生たちに語り考えあう場をつくりだしている。しかし彼らの活動は教育課程内には位置づけられない。

3) 「総合的な学習の時間」も中学、高校では新たな学習の展開の場として定着しないまま時間数が削減された。『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査』(2003年)では、「受験勉強は本当の勉強とは言えない」について「そう思う」の回答は、中学生は約3割、高校3年では5割を超えていた。そして「興味のあることをもっと勉強したい」と思う中学3年生は84%、高校3年生は92%だった。こうした学習意欲に応える中等教育が求められている。

4) フランスのラ・シオタにある le Collège Lycée Expérimental Freinet (CLEF)は、公立学校であるジャン・ジョレス・コレージュ(中学)からリュミエール・リセ(高校)へと連続してフレネ教育をおこなうクラスを設置した中等教育プログラムである。フランスでは南仏ヴァンスにあるフレネ学校を拠点に、フレネ教育をおこなう公立小学校は各

地にある。しかし中等教育では、2006年に設置されたジャン・ジョレス中学校のフレネ教育クラスが初めてのことである。我々は2013年3月にCLEFを訪問し、ジャン・ジョレス中学の授業を丸3日間参観し、放課後および休日に教師たちとディスカッションをおこなうことができた。教師たちがフレネ教育を中等教育で実現した動機として語ったことは、生徒にも教師にも苦痛な教授中心の授業をおこなう「伝統的学校」を変えたいということだった。地理・歴史、文学はもちろん数学などの自然科学の教科でも、生徒それぞれが自らの課題をプレゼンテーションし、討論して学び合うことを徹底していた。伝統的な教授中心の授業から、生徒自身が学習課題を持ち学ぶ授業へとフレネの自由教育思想の中教育への展開を見ることができた。

5) この学校見学を通して、日本の自由の森学園中学・高校の教育との共通性が見えてきた。教師からの教授中心ではなく生徒の自主的な学習を基本とすること、それを支える教師の教材研究の努力、発達障害や不登校経験を持つ多様な生徒の学習要求の掘り起こし、数値ではなく文章による生徒と教師の相互評価などは、CLEFと自由の森学園に共通している。フランスと日本の社会と文化の違い留意しつつも、現代のフランスと日本で自由教育の思想が中等教育で実践的にどう展開しているかを明らかにすることは、将来の中等教育のありかたを構想するうえで意義深い。

2. 研究の目的

本研究の目的は、自由教育思想が現代の中等教育を変革しうる可能性をどのように持ちうるか、以下の点から探求することにある。

自由教育思想を現代の中等教育のなかで展開しようとしている日本とフランスの学校の事例を調査し、そこでの実践的試みを包括的にとらえ発信する。

中等教育での縦割り教科教育から、学習者が知を自ら統合し思考を発展させるような横断的教科教育へと変えるための実践の意義を、哲学や教育学とりわけ学習論から検討する。

発達障害など、学校のなかで居場所を得にくい子どもたちの学びとコミュニケーションのプロセスをとらえて教育における「自由」の意味を検討する

3. 研究の方法

1) CLEF 現地調査

2014年9月に、ジャン・ジョレス・コレージュとリュミエール・リセを訪問し、授業やフィールドワーク等、中等教育におけるフレネ教育の実践を参与観察した。また両校の校長ら管理職、フレネクラスの教師、生徒、保護者のインタビューをおこなった。

2016年3月に、日本の自由の森学園高校の教師2名を伴って、ジャン・ジョレス・コレージュとリュミエール・リセを訪問し、参与

観察とインタビューをおこなった。また、日本の自由の森学園の教育について、当校の教師によるプレゼンテーションをおこない、オルタナティブな学校教育を目指す点での共通性を確認し、日本とフランスの学校文化の違いや生徒の市民的自立のための学習の方法のありかた等についてディスカッションした。

2) 自由の森学園の教育についての調査

2014年11月公開研究会を参観し、2015年1月に授業参観と生徒インタビューをおこなった。

2016年11月、授業参観と生徒インタビュー、教師との研究協議をおこなった。

3) フレネ教育に関する文献を収集し、先行研究を検討するとともに、現地調査で入手したCLEFの教師の学会発表原稿を和訳し、検討した。

4. 研究成果

1) CLEFのカリキュラムの特長

教科の授業展開

生徒の進行役(Président) PCで生徒や教師の発言など授業の記録をする係(Secrétaire)が決められ、生徒たちの話題提供(Entretiens)から始まる。生徒の話題について、他の生徒から質問があり、内容によっては教師が以前の学習内容と結びつけた質問をする。教科書は使わない。生徒による記録は教師が補足して、次の授業の教材プリントになる。

学習指導要領にあたるものはあるが、コレージュ4年間の間に学ぶべき内容が示されていて、順番や学年が決められてはいない。個別学習やアトリエでの学習や生活経験から生徒の持ち込む話題によって、授業内容が組み立てられていく。

個別化学習 Travail Individualisé

4学年が混合で7クラスに分かれる。フレネの教師7人が、できるだけ多様になるように分けた生徒たちを受け持つ。TIは、生徒自身が2週間ごとの学習計画をたて、その達成をめざしておこなう。上級生が下級生に教えたり、得意な生徒に苦手な生徒が助けをもらったり協力し合う。特に新入生の学習計画は、教師だけでなく上級生もサポートする。

アトリエ

自分がより深く学習したい分野ごとに分かれる。これも異学年で構成される。フレネの7人の教師がそれぞれの専門を担当する。

評価

点数をつけない。2週間ごとの学習計画に沿ってどこまでできたか、自己評価と保護者・教師の評価が書き込まれる。アトリエとTI、各教科の学習を関連付けるように組み合わせ、生徒が学習計画を立てる。どうしていいかわからないときは教師や上級生の助言を得るが、だんだん自分で考えられるようにしていく。そうした学習計画にコメントを書き込んで評価が行われる。

コレージュ4年間での学習到達度を測るテス

トで、フレネクラスは総じて達成度が高い。クラス会議

日本の学級会に近い。教育計画を生徒自身が参加して決めるという面と、クラスの中でおこなっている生徒同士の問題を解決する面がある。

2) CLEFの意義についての考察

どの授業も生徒たちが司会者、タイムキーパー、記録者を分担しながら授業が進行していた。また前回までの授業の記録をもとにした授業プリントが配られ、生徒たちの発表とその記録が教材として構成されている。教科の内容をどのような順で何を学んでいくか、いわゆる教科教育の系統性が生徒たちの現状と関係なく決められるのではない。生徒たちがこれまでの学習や生活経験の中ですでに知っていること、関心を持っていることなどを持ち寄りながら、何を学んでいくかが次第に立ち上がっていく。一人ひとりが自分でつくる学習のプロセスの中に、個別化学習の時間と教科の授業が有機的に結びついていくように、教師の指導のしかたやカリキュラムの構成が工夫されていた。

教育課程における教科の系統性は、はたして個々の子どもの学習のプロセスとどのような関係があるのか。学問の系統性重視が、子どもの興味の複合性と学びの多様性を損なっていないかを検討する必要がある。

2) 自由の森学園の教師とのCLEFについての検討・考察

生き方としての民主主義を育むことが教育においてはもっとも大事なことであることを、CLEFの教育は示している。

1, 相互承認・尊敬(リスペクト)がある。

2, 自分の仕事、役割、出番がある。

3, それらの結果としての相互応答がある。

授業は全体として落ち着いたトーンであったが、教師の制圧による静寂ではなく、互いへの無関心によるものでもない。「発表」と「応答」が「場を構成している」ことがとても大切な要素になっていた。

発表を取り入れた授業は日本でも珍しくはないが、日本の授業で往々にして見られるのは「発表のカラオケボックス化」である。授業で誰かが発表しているけれど、誰も聴いていない。

民主主義は、一人ひとりが主人公になる/なれることである。誰もが「ないがしろ」にされないことである。自由の森学園でも、学校行事では司会、進行、記録を生徒がおこなう。こうした行事における自主運営を授業での学びに活かさないだろうかという問いと課題意識は以前からもっていた。フレネ教育でおこなわれていることは、学びの場に必要ない運営を生徒が担い、それを通じて学習における民主主義を実現しているとも言いえるのではないか。一人ひとりの個性性と共同性がどう折り合いをつけるのか。この問いは理論的・実践的に大きな課題であり続けている。

3) 教育における「自由」とは何か

自由の森学園が開校した 1985 年は、管理主義教育が問題になっていたこともあり、「管理や規制からの自由」な教育が求められた。自由の森学園では開校以来、生徒の自主性の尊重と規律との関係をどう捉えるかが実践的理論的課題であり続けている。一方、ジャン・ジョレス・コレージュでの授業では、授業中の私語は厳しく叱責される。私語は共同の学びの条件でもある相互尊重と相反するからである。CLEF の授業の教材は生徒の発表から構成されていくが、自由の森学園では主として教師が用意した教材によって授業が構成されていく。こうした「自由」や「自主性」のとらえかたの違いをさらに分析し、それらが教育実践にもたらす影響について考察してみる必要がある。

4) 今後の研究の課題

上記の「自由」や「自主性」をどう考えるか、生徒達自身の考察を含んで取り組んでいくために、自由の森学園とリュミエール・リセの生徒達の英語による交流活動が始まっている。今後はこうした生徒も参加した研究交流のなかで、現代の中等教育が抱える課題と変革の可能性について検討していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 23 件)

片岡洋子「中学生をおとなにしていく教育課程づくり」『生活指導研究』No.33、日本生活指導学会、査読無、67-71、2016 年

片岡洋子、多様な性の人々と生きる社会を教室から、教育 12 月号、査読無、84 - 87、2016 年

佐藤和夫「市民運動から始める『政治』の可能性」『季論 21』34 号 73~80、2016 年 10 月、査読無

佐藤和夫「「不安定な」世界の中での新しい政治の可能性」『NO かながわ総研 研究と資料』No.196、41~52、査読無、2016 年

佐藤和夫「「政治」の「再生」とポスト・マルクス主義 ムフ、ラクラウとアレント」『総合人間学』第 10 号、154~170、査読無、2016 年 7 月、

大島久美子・山田綾・中川千文「放射線の身体への影響および安全基準」家庭科放射線授業づくり研究会『原発と放射線をとことん考える！いのちとくらしを守る 15 の授業レシピ』合同出版、120-137、査読無、2016 年 8 月

山田綾「教材研究・教科内容研究に求められる現代的視点 - 生活のなかの政治性・対立関係を見つける - 」広島大学附属小学校・学校教育研究会『学校教育』1 月号、査読無 pp.2-9、2016 年

佐藤隆「アクティブ・ラーニングは救世主たりうるか」『生活教育』10 月号、査読無、44-51、2016 年

佐藤隆「現実と向き合う「教師教育改革」を」『教育』7 月号、査読無、pp59-67、2016 年

〔学会発表〕(計 5 件)

片岡洋子、「家庭科女子のみ必修」と教育学におけるジェンダー、日本教育学会第 73 回大会、2014 年 8 月 23 日、九州大学

佐藤和夫、歴史的転換期における日本の女性と母親、「母親文化」国際サミットフォーラム(招待講演)、2014 年 4 月 30 日、中国山西省 山西農業大学

片岡洋子、自由教育の現代的展開の可能性 ~ フレネ教育と生活綴方に即して、フレネ教育研究会(招待講演)、2015 年 8 月 2 日、和光小学校

片岡洋子・和井田節子、子どものケアと支援に関する研究 ~ 被災地の学校の教育実践および支援の実態調査をとおして、日本教育学会第 74 回大会、2015 年 8 月 30 日、お茶の水女子大学

佐藤隆、恵那の生活綴方教育と教師教育の課題、日本教師教育学会代 25 回大会、2015 年 9 月 19 日、信州大学

〔図書〕(計 7 件)

宮寺晃夫編著『受難の子ども いじめ・体罰・虐待』査読無、一藝社、2015 年(片岡洋子、「いじめ」をとおして、学び、つながる、62-75)

片岡洋子・久富善之・教育科学研究会編(共編著)『教育をつくる 民主主義の可能性』旬報社、査読無、2015 年 8 月

竹内常一・折出健二編『シリーズ教師のしごと 第 1 巻 生活指導とは何か』高文研、2015 年、査読無、(山田綾、生活指導と授業 学びから世界参加へ、109-140)

佐藤和夫・藤谷秀・渡部純責任編集『わがままに生きる哲学』、2016 年 4 月、総ページ 217、はるか書房、査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 洋子 (KATAOKA Yoko)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：80226018

(2) 研究分担者

佐藤 和夫 (SATO Kazuo)

千葉大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：90114496

山田 綾 (YAMADA Aya)

四天王寺大学・教育学部・教授

研究者番号：50174701

佐藤 隆 (SATO Takashi)

都留文科大学・文学部・教授

研究者番号：70225986

(4) 研究協力者

菅間 正道 (SUGAMA Masamichi)

自由の森学園中学・高校